

人間性と民主主義

F・M・コツラオ

恩田麗子、マルチエラ・モルガンティ 訳

はじめに——シームルグの神話

哲学者池田大作は、共に行動することがいかに大切なことであるかを説明するために、十二世紀ベルシャの神祕主義的詩人フアリード・ウッディーン・アツターール (Farid al-Din 'Attar)⁽¹⁾の「鳥たちの会合」(*Poema degli uccelli*)に言及している。これは、世界中の鳥たちが集い、神話に出てくる神シームルグ(不死鳥)を探す物語である。ヤツガシラが皆に、その神が住む高い山を知っていることを告げ、そして鳥たちは神を探す旅へと

出発する。鳥たちは、スーフイーの認識の階梯のシンボルである、探求から愛、知識、驚嘆、満足、富裕、清貧の七つの谷を飛び越えていく。その途中で多くの鳥たちが諦め、頂上に辿り着いたのはわずか三十羽だけだった。しかもそこにはシームルグがいないことに気づくが、しかしシームルグがベルシャ語で「三十」をも意味することから、鳥たちはそこで、シームルグとは彼ら自身であると気づくのである。ここで詩人は、生きとし生けるものが相互に信頼し、共生しているなかに神は存在していると訴えている。より簡潔にいえ

ば、理想とは私たちの手の届かないものではなく、それを探求する行為のなかにこそあるということである。また本当の勇氣とは、「理性の悲觀主義」と「意志の樂觀主義」のもと、決して諦めないことである。⁽²⁾

そして、榮譽や名声を求めることなく、様々な困難を乗り越えてきた人々の熱意こそが、その勇氣なのである。私たちは、ひとつの夢を追い求めてここに集いあつた。その夢とは、民主主義普及のための新たな手段を見つけることである。セバステイアーン・マツフエットーネ (Sebastiano Maffettone, 1948)⁽³⁾ が最新の著作で示しているように、世界とは思考可能な全体であると信じ、新たな道を模索してみたいと思う。

1. 障害としての教条主義

私たちは対話を通して、偏見とそこから起こる差別を排せようと考へた。エドワード・サイード (Edward Said, 1935-2003) は差別の原因を犠牲者ではなく迫害者に見出しているが、⁽⁴⁾ 私達も同様の考へである。劣っているのは犠牲者ではない。むしろ迫害者の方が偏見に左

右されているのである。様々な哲学的、あるいは宗教的展望が一致点を見つけられるような倫理上の原則的指標を確立することにおいて、イランの哲学者マジッド・テヘラニアン (Majid Tehrani, 1937) が指摘する三つの欠くべからざる自由を念頭に置くことが有益であろう。すなわち、それは教条主義、幻想、そして渴望からの自由である。⁽⁵⁾ 実際のところ、対話を妨げる本当の障害は、教条主義の柔軟性のなさや、安易な解決法が見つからぬという幻想、そして権力への果てしない渴望なのである。

私は、自身の研究とアラブ諸国での生活の経験を通して、ヨーロッパと中近東諸国におけるコンセンサス、教育、情報について考察し行動を起こす必要性を強く感じるようになった。

自らの信念をあまりにも頑なに主張することは、往々にして人を教条主義に導く原因ともなる。前出のフアリッド・ウッディーン・アッタールの詩の中に詠われた共同体の「理想」を例として取り上げたが、それは、一つの価値が、それ自体の価値としては有徳な

ものであっても、いかにして自由への障害となりうるのかを示していると思われる。イスラム文化においては、「共同体」(Umma)信仰が主要な基本的価値の一つである。このことは、アッタールの詩のなかに喚起されているからだけではなく、十九世紀以降の知的論争において「共同体」が中心的役割を果たしてきたことから窺うことができる。共同体のコンセンサスは権力の行使を正当化する価値であり、統治者と被統治者との関係の本質的側面である。この点に関しては、預言者ムハンマドの「私の共同体においては、真実について対立することはないだろう」との有名な言葉を思い起こすだけで十分であろう。共同体の団結はひとつの価値であるが、それにも拘泥すると断絶につながり、さらには意見を異にする少数派の排除を招くことになる。

実際、合意の文化が激化すると、異なる意見に対し許容がなくなり、異論は団結に対する大きな脅威(フイトナ、*fitna* = 内乱)として排除される。イスラムの共同体の歴史は、繰り返されるフイトナ、すなわち団結を

根本から分断させる共同体内部の不一致の噴出によって特徴付けられる。このことに関しては、ハワールジユ派(Khawarij)⁽⁶⁾の分離をもたらした四代カリフ統治時代の終わりに起こった問題、それに続くカリフ選出に対しての異議、そして後にシーア派教徒と呼ばれるようになるアリーの信奉者達の分離などを思い起こせば十分であろう。

2. ムータジラ派の思想運動

時とともに少数派のグループに対する不寛容と激しい抑圧を生んだこの問題から、さらに一歩、この論考を先に進めてみよう。ここでイスラムの歴史におけるもうひとつの重要なポイントである、文化改革の始まりに触れておきたい。理性と批判に基づいた思想の発現のひとつの例として、しばしばアドニス(Adonis)⁽⁷⁾やメデブ(Medeb)⁽⁸⁾も言及しているこの運動は、八〜九世紀に起こった「創造されたコーラン」および創造の過程と被造物の進化の思想を信じていたムータジラ派(mu'tazili)⁽⁹⁾の運動のことである。そしてこの運動を土

台にして、文学についてのひとつの重要な思想が生まれる。それは、創造に対する理想の概念が新たなものになり、永遠の昔から (ab aeterno) 固定されたものではないのであれば、人間の創造性が生み出す作品の形も新しくなりうるというものである。それはすなわち、それまで単に古典の模倣でしかなかった人間の知的活動の成果も、新たな形を得ることができるということであった。ムータジラ派の思想が支配的になった段階で、こうして変化と美の規範の革新への扉が開かれたのであった。

ムータジラ派の思想が確立した時期からその後の時期にかけて、ムータジラ派教徒は常に反対派からの迫害を受けた。彼らに対する激しい弾圧によって、この時代に存在した様々な理論は誤って捉えられ、結果、その後の世代にとって当時の理論は理解しがたいものとなった。例えば、詩における革新概念 (Ibda) は、次世代の評論家たちには既に理解できないものとなっていた。

その後、アラブ文化とイスラーム文化を再生させよ

うとした十九世紀の若い世代は、革新の必要性に迫られることとなった。

3. 民主主義構築への革新的議論

当時思想の自由がいかに大事であったか、どれほど刺激に満ちた考えを生み出したかを示すため、革新について交わされた重要な議論の中のいくつかを挙げてみよう。

エジプト近代思想の巨人の一人であるターハー・フセイン (Taha Husayn, 1889-1973)⁽¹⁰⁾ は、一九三八年の論考「エジプトにおける文化の将来」⁽¹¹⁾ のなかで、イスラーム文化という広い枠組みの中において、エジプト人のメンタリティーは三つの要素に拠っていると主張している。すなわちギリシャの理性主義、ローマのプラグマティズム、そしてアラブ人の宗教心である。彼は、文化と知識は文明と独立の基盤をなすものとみなし、自由な、かつ万人のための教育が、健全な民主主義の構築のために必要不可欠であると考えた。また同時代に生きたルトファイ・アッサイイド (Lutfi al-Sayid, 1872-

1963)⁽¹²⁾のようなりベラル派の他の知識人たちや、保守主義者のアッバース・マフムード・アルアツカード (Abbas Mahmud al-Aqqad, 1889-1964)⁽¹³⁾は、イスラームの文化的・政治的伝統に新たな解釈を与え、そこに近代社会の建設に必要なリベリズムの原理を見出した。

トルコでは、政治家ケマル・アタチュルク (Kemal Atatürk)⁽¹⁴⁾がオスマントルコのカリフ統治を廃止し、近代化への大きな一歩を踏み出した。そしてさらに、社会の民主主義化を目指し、国家を宗教から切り離して宗教的感情を個人の領域へと移すことによって、決定的な変革をもたらした。イスラーム改革主義者たちは、政治制度の革新に有利なファトワ (Fatwa = 宗教令) を発布することによって社会の近代化を促したが、その継承者たちの中には様々な立場のものがいた。

オックスフォード大学で専門的に研究を重ねたアルアズハルのシャイフであるアリー・アブド・アッラーズイク (Ali Abd al-Raziq, 1888-1966)⁽¹⁵⁾をはじめ、何人かはこの改革を好意的に受け止めていた。アッラーズイクの主張は、イスラーム教徒は、歴史の進化や他国からも

たらされるものを認識して、政治構造を考え直すべきだというものであった。しかし国民の激しい反発を受けたことから、自説の立て直しを余儀なくされた。当時、伝統や、神話化された古の時代からそのまま伝承されてきたものを守る、ムスリム同胞団の運動が優勢になっていった。歴史の流れを逆行するかのような理想主義を求めるこの運動は、宗教的側面のみの問題には留まらなかった。それはライフスタイルや過去の解釈、そして自己と他者の捉え方にも大きく影響を与えた。⁽¹⁶⁾

この執拗な反歴史的姿勢を後押ししたのは、団結という理想の上に築かれたウンマのアイデンティティを、共同体内部の宗教的意見の相違や外的要素などの絶え間ない分裂の脅威から守る必要性であった。

政治体制としては、ブルギバ (Habib Bourguiba, 1903-1962)⁽¹⁷⁾の行った改革の一部は、チュニジアの偉大な改革主義者ターヘル・ハッタード (Taher Haddad, 1899-1935)⁽¹⁸⁾に着想を得たものであることはよく知られている。そしてその事実、中近東諸国における歴史の中で、実りある対話が体制と識者の間に交わされたことを示し

ている。多くの人々が自国を離れ、他国に移り住む今日、地中海を挟んで向かい合うヨーロッパと中近東諸国の知識人と政治家が、民主主義と法規について早急に語り合い、グローバルゼーションがもたらした複雑な問題に対し、建設的かつ平和的な解決策を共に模索していくことが求められている。

4. 教育の重要性と宗教

合意と団結は、基本として伝えられる価値、換言すれば、教育のレベルで伝えられる価値である。アラブ諸国の多くには、宗教色のない学校もあればイスラーム、キリスト教の学校もある。例を挙げると、ベイルートにあるイエズス会の寄宿学校サント・ジョセフでは、一世紀以上前からシリアとレバノンの支配階級を育成している。同様に、カイロとベイルートのアメリカ系大学は長い伝統を誇っている。

エジプトでは植民地時代の多党制の後、時をおかずナセルの一党制に戻り、知的論議も国の統一の名の下に無に帰した。シリアとイラクにおいても状況は大差

なかった。

教育における自由は決定的である。なおこれについては、サルヴェミニ（Gaetano Salvemini, 1873-1957）⁽¹⁹⁾の主張に触れておきたい。彼にとつて世俗主義（laicismo）⁽²⁰⁾はイデオロギーではなく、「教条的な方法に對置される批判の方法であり、教派的な不寛容に対し、あらゆる意見に敬意を示す方法である」⁽²¹⁾。これは、近代国家、特に世俗の教育について行われた最も概括的な討論からの引用である。ここでいう世俗とは、信仰を排除するものではない。さもなくば、それは単なる知識主義に陥ってしまう。エジプトのナセル派改革者やその他のアラブ諸国の改革者たちと同様、イタリアの哲学者ジヨヴァンニ・ジェンティーレ（Giovanni Gentile, 1875-1944）⁽²²⁾は、統一的教育システムの中に国の統一の用途を見た。このような考え方の中にはしかし、教条的な教育へと向かう危険性が潜んでいる。この危険を認識してサルヴェミニ⁽²³⁾は、「教育の自由は手段であり、目的であり、すべてである」と断言している。

過去においてもまた現在でも、上からひとつのイデ

オロギーを押し付けることは、それ自体が問題であり、害を生む。それは、神話の中の山賊プロクルステスが、拷問用の寝台にサイズが合わないといって犠牲者の足を切り落としたり引き伸ばしたりしたのと同じことをするようなものである。ナセル主義の普及につれて、エジプトにおける民主主義がその萌芽的段階で急速に崩壊したことが、それを証明している。一方イタリアにおいては、ファシズムがもたらした内政と外政への損害を考えるだけで十分である。ボツビオ (Noberto Bobbio, 1909-2004)⁽²⁴⁾ はファシズムのマイナスの側面を、権威的な権力による民主主義の否定、そしてヒエラルキ―と権威主義のために自由と平等の原理を否定したと、このふたつに要約している。

では、複数政党制度が存在すれば、民主的な制度が保障されると断言できるのだろうか。この問いに対し、エイナウディ (Luigi Einaudi, 1874-1961)⁽²⁵⁾ は次のような適切な答えを与えている。「国家は、上から国民に押し付けられた、単なる法的組織ではない。国家は、国民そのものの中に、また国民によって選ばれ、政府に

送られた代表者の中に存在する。特に、市町村の自治体、公的機関、教会、学校、工場、そして人間が活動し、集まり、分かれ、考え、祈り、楽しむような場所に存在する」⁽²⁶⁾。この考えは、諜報部の監視下で私的な生活空間の中に抑圧されている自由な討論を復活させるために、アラブ市民社会の様々な組織に対し、その集まる場所と意見を述べる場を与えるべきだという、モロッコの学者ブルハーン・ガリウン (Buhār Ghaliun)⁽²⁷⁾ の主張に似ている。

5. 八〇年代のイスラーム改革運動の意味

八〇年代にかけてアラブ諸国では、国家主義の危機に立ち向かうため、また、中流階級の拡大によって生まれた新しいニーズに応えるために、インフイターハ (Infitah) という経済開放政策が実施された。この政策は、経済成長の失敗による社会的圧迫を軽減するとともに、国内の市場経済を促進して世界の経済発展に追いつこうと計画されたものである。最初にエジプト、続いてチュニジア (一九八八年)、ヨルダン (一九八九年)、イエ

メンにおいて、新たな社会的、政治的組織が形成された。この新しい枠組みの中に定着したのは、主にイスラーム運動であった。そして、ムスリム同胞団の理論家サイード・クトゥブ (Sayid Qutb, 1906-66)⁽²⁸⁾等のイスラーム改革者が、政府の不正、汚職、抑圧に対抗するイスラームの正義の規範を提示した。

しかし、これらのケースの裏側を見てみると、民主主義はただ形式的なものに過ぎなかった。それは、近年エジプトに起こった「Kifaya キフアーヤ（もうたくさん）運動」が訴えたとおりである。前回のエジプト大統領選挙の際にも、任期を終えたムバラクが改めて立候補したが、多くの知識人はムバラク以外の候補者が立つことを強く望んでいた。エジプト政府に対する国際的な圧力に支えられ、抗議運動の主張は政府に認められはしたものの、現実には、与党が年月をかけて築いた人脈の結束によって、野党は大敗を喫した。しかし、この出来事を通して、国民の不満が証明されることとなった。その不満の声は、広く社会に存在することを許された唯一の反対組織、すなわちモスクで

活動する説教師の組織へと集まっていった。多くの場合、待ちに待った政治の開放政策は、貧困と疎外に苦しむ人々の経済的・政治的な期待と希望に応えることではなく、国際市場の要求を満たすための、単なる抑制のない経済的自由主義を促進するだけのものとなった。ブルハーン・ガリウンによれば、問題は党派的でない政治的信念が存在しないことであり、したがって民主制度の構築のための客観的、物質的、組織的、イデオロギー的な要件を満たすのは困難であると同時に、危険を伴うことであった。

アラブ諸国の民主主義の現状を分析したガリウンは、先ずそこに欠けているものを挙げ、その欠陥を補う要件を提示した。特に、「副次的であっても、ある少数党派に対する政治的責任の付与、そして民主的合法性を実現するために、国内で実施されている検閲の縮小」は優先されるべきだと強調している。また、「責任のある、職権を付与された任務に就く権利は誰でも持たなければならぬ。同様に、異なった社会階級の国民による事業の自由、意見及び結社の自由の行使が確保さ

れなければ、平和的で順序立った形での政権交代の原理は保障され得ない」とも述べている。さもなければ国家は、権力を掌握した一握りの人間のほしいままにされてしまう。その場合、強者が弱者に対して優位に立つ状況が生まれる。人間社会が法に依拠しなければ、不満が蔓延してしまふ。

ジョナサン・スイフトのガリバーや船乗りシンドバッドは、旅から帰ってきたあと、他国の非文明と比較し、法治国家の優位性を称賛している。法律が存在しなければ、ただ逃げるしかない、野蛮な社会となってしまうことに気付いたからである。人間の作った法律の上に成り立つ世界、神の意志に基づいた法律の上で成り立つ世界と、それぞれに住む世界は違っても、この二人にとって、全ての人間に対して平等な法律の存在は、欠くべからざるものであった。

多くの国で現在でも実施されている「プロクルステスの寝台」的制度を廃止するためには、政治的、社会的制度の外に問題の原因を求めてはならない。逆に、基本的権利を明確にし、共有し、遵守する必要がある。

我々の国において、あるいは他の独裁国家においても、基本的権利が侵害されるかぎり、たとえ間接的であっても、すべての人がその影響を受けることになる。

6. アラブにおける民主主義の課題

カントは、地球のどこかで起こった権利の侵害は、地球のいかなる場所でも感ずることが出来る⁽²⁹⁾と主張した。これに先駆けて、既に十三世紀日本の仏教僧、日蓮は、その著作の中で同様のことを述べている⁽³⁰⁾。今日、民族の移動や大規模な自然災害の影響を見たとき、彼らの主張が正しいものであったことに気づかされる。

移民の問題は、民主主義の問題の一部として憲法上で取り扱われるべきであろう。現実には、移民の大部分はハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906-1975) が定義したように、全ての権利を剥奪され、搾取され、その存在を認められることのない「裸の人間」である。法律の欠如は疑いなく墮落をもたらす。カモツラ団員 (マフィア) の船や密売人の船の操業は、その明らかかな例である。残念ながら、我々の社会の「人権の尊重」

は、多くの場合、不法入国者臨時収容施設の中には存在しない。不思議なことに、イタリアの警察はテロリストの捜査は行うことができても、密輸業者の活動を止めることはできない。同様に、政治家、企業家と労働者協会は、労働力の配置政策が出来ないのである。

イタリア、特にその南部の歴史と多くのアラブ諸国のそれには共通点が多い。すなわち、どちらの社会にも、本当の意味での激しい革命的な運動が起こったことはない。たとえば、エジプトの「アラヒーヒー」(Urahi)運動⁽³¹⁾、そしてサアド・ザグルール(Sa'ad Zaghlul, 1860-1927)⁽³²⁾のために行われたデモのような、国民の解放のための闘争運動は、本当の自由主義革命を引き起こしはしなかった。イタリアやアラブ諸国の社会の解放は、

少数のエリート知識人によって行われたのである。かつて王族、アミールあるいは外国の列強によって統治されていた国は、自由主義の基準に基づいた変化、成熟段階を通して独立国家になったわけではない。ポツピオはゴベッティ(Piero Gobetti, 1901-1926)⁽³³⁾を引用し、自由主義革命とは、社会を抜本的に変革する為のボトム

アップの運動であると解釈し、次のように述べている。

「自由主義革命は、自由主義の名の下に、古くから根付いているイタリアの社会的罪悪から民衆を解放する革命であり、その自由主義とは、哲学的な観点からみれば対立的な歴史観念、経済的な観点からは自由市場の理論、また政治的な観点においては法律に基づいた国家の理論として考えられたものである。この国家は、あらゆる専制政体に反対し、市民の基本的な自由の行使を保障する」⁽³⁴⁾

既に十九世紀前半、エジプトのルトフィー・アツサイドとシリア、チュニジアの他の知識人は、自由市場及び市民の自由を保障する法的制度は不可欠な要素であると主張していた。

ここで強調したいことは、アラブ世界のみならず、他の地域にも今日存在する問題が、政治的な指導者が慌てて押し付けた選択と、アラブ社会主義という夢への情熱に起因して、国家の解放の時期に生じていることである。アラブの知識階級はナセルの計画を全面的に支持していたが、六日間戦争の敗北は社会に急激な

覚醒をもたらした。ナセルは辞意を表明したが、危機的な状況においては体制の転換は避けるべきとの判断から、ナセル政権は維持された。しかし、この決定は状況をさらに悪化させることとなった。内部討議によって広く問題を検証し、責任の所在を追及するかわりに、すべての政治的な批判が抑圧され、敗北は米国のイスラエルの陰謀によるものと判断されたためである。

このような政治の流れを勇氣ある数人の知識人は批判した。同じ時期、詩人アドニス(35)は「小王国の歴史についての緒論」という詩を著した。詩は、独裁政体による罪悪とパレスチナ人の苦しみに対する人々の無関心を訴えている。また、「これが私の名前(35)」という詩の中では、個人の意識の目覚め、自己責任の引き受けという、個人の内部で起こる変化の必要性が何度も強調されている。しかしアドニスは、東洋の政治制度の大罪のみならず、拝金主義のために原則や理想、人の命まで犠牲にする西洋社会の非人間性も批判した。共通の悪についての議論は不可欠である。しかし意見が異なる場合、池田はミリンダ王と賢人ナーガセーナ(那先)

比丘との対話を、西洋の合理性と東洋の知恵との精神的な出会いの模範にする事を提案している(36)。議論は政治的な視野ではなく知恵という視野に立つて行われるべきである。政治的な議論の場合、経済的脅迫や武力の誇示によって自らの優位性を主張しようとしてしまうため、合意や解決に至るのは困難である。知恵を基にすれば、他文化に対する理解と尊重が生まれ、また創造性を基にすれば、相手の尊厳を否定することなく、一致点あるいは双方が合意できる解決策を見出すことができる。この考え方は、自由で対等なコミュニケーションを目指す、ハーバーマス(Jürgen Habermas, 1929-)のコミュニケーション的理性の概念と一致する(37)。

7. 個人の変革とコンセンサス形成

社会的、政治的な姿勢に変化をもたらすためには、関係者全員の積極的な参加に基づいた、コンセンサス作りの長い作業を行う以外にはない。そういった意味では、知識人の責任感を喚起することは重要である。ポツビオが示唆したように、知識人は、善意について

の弱々しい発言、あるいはこの世界に嫌気が差し、隠遁してしまうといった事ではその責任を果たすことはできない。⁽³⁸⁾

アドニスが書いたように、また、池田が断言しているように、全ては一人の人間から始まるのである。よき人間関係を作ることのできる個人の行動は、周囲にポジティブな影響を与える。人間として、偏見や差別を越えていくためには、自己考察が不可欠である。⁽³⁹⁾ ユングは、人間の本当の抜本的な変革は、個人間のインタラクションがなければ不可能なことを明らかにした。対話を求める今日の一人ひとりの努力は、私たちを明日の平和の文化に導いてくれることであろう。小さな出来事から私たちは多くの人間関係を構築し、その積み重ねによって、自然に、より民主的な人間になることができるのである。

注

(1) 一一四二年に現在のイランに生まれたペルシヤの詩人。

彼が著した『示唆の本』(*Le livre de conseil*) は一八一九年にパリでアントワーヌ・イザーク (Antoine Isaac) とシルベストル・ドゥーサシ (Silvestre de Saey) によって編集され翻訳されている。また、『鳥たちの言葉』(*Le Langage des Oiseaux*) はジョゼフ・エリオドール＝ガルセン・ドゥータッシ (Joseph Héliodore Garcin de Tassy) によって編集されているが、彼はその著『ペルシヤ人における詩と哲学』(*Poésie philosophique chez les Persans*) のなかでもこの詩に言及している。

(2) Dikeda e M.Tehranian, *Civiltà globale* (ミラノ、二〇〇四年)、七二―三頁。日本語版『二十一世紀への選択』(マジッド・テヘラニアン／池田大作、潮出版社、二〇〇〇年) 三九九頁。なお、ここでは「認識の悲観主義」となっており、イタリヤの思想家アントニオ・グラムシの言葉として紹介されている。

マジッド・テヘラニアンは、一九三七年イランに生まれる。現在、ハワイ大学教授、戸田記念国際平和研究所所長。同研究所は東京の東洋哲学研究所、創価大学に続き池田大作博士が設立したもの。

(3) 一九四八年生まれのイタリヤの哲学者。現在ローマのルイス・グイド・カルリ大学で教鞭を執りながら、ハーバード大学およびタフツ大学でも客員教授をつとめている。『リベラリズムの基盤』(*Fondamenti del*

liberalismo、ローマ、一九九六年)、『生命の価値』(Il valore della vita、ミラノ、一九九八年)、『公共倫理』(Etica pubblica、ミラノ、二〇〇一年)、『世界の思考可能性』(La pensabilità del mondo、ミラノ、二〇〇六年)など人権、倫理、政治哲学に関する多くの著作がある。なお、本文の「最新の著作」とは『世界の思考可能性』を指す。

- (4) 『文化と帝国主義』(Culture and Imperialism、ニューヨーク、一九九四年)、日本語版は一・二巻とも大橋洋一訳、みすず書房、一九九八年—二〇〇一年

- (5) 『二十一世紀への選択』マジッド・テヘラニアン／池田大作

- (6) 「外へ出て行く者たち」という意味で、七世紀後半に出現したさまざまなイスラーム・セクトの一般的総称である。その起源は最初のイスラームの市民戦争、すなわち預言者ムハンマドの死後数年間続いたムスリムの共同体に対する覇権をめぐる紛争にある。六五六年、第三代カリフであったウトマン・イブン・アッファーン(Uman ibn Affan)が反乱軍に殺され、その後継をめぐつて、ムハンマドの従弟で義理の息子でもあるアリーとダマスクスの統治者でちにウマイヤ朝の初代カリフになったムアウィヤ(Mu'awiyā)との間で紛争があった。はじめのうちはハワーリジユ派はアリーの側についていたが、六五八年に起きたシッファインの戦いを機にアリーからの申し出を断った。ハワーリジユ派は

アリーに反抗するようになり、六六一年にはアリーを暗殺した。今日では彼らは南イラクに集中しており、スンニ派ともシーア派とも区別される。

- (7) 一九三〇年にシリアに生まれた詩人で、アラビア詩における最も重要な改革者の一人である。彼は一九五六年からパリへと移り住むことになる一九八二年まで、ベイルートで知的活動を行う。なお本文でとりあげた箇所は、『祈りと剣——アラビア文化論』(La prière et l'épée. Essais sur la culture arabe、パリ、一九九三年)からのものである。彼のおもな著作として以下のものがあげられる。『ダマスクスの人ミヒヤールの歌』、『メタモルフォーゼの本』、『スーフイズムとシチュールレアリスム』。

- (8) 一九四六年にチュニジアに生まれた詩人でエッセイストである。現在ソルボンヌ大学でアラビア文学を教えている。彼の作品は非常にインテリカルチャール色彩が濃く出ている。なお、本文で取り上げた箇所は、『イスラームの病』(La Maladie de l'Islam、パリ、二〇〇二年)からのものである。

- (9) 九世紀に形成されたイスラーム神学の一派で、知的階級に影響を与えた。彼らによれば、『聖クルアーン』は宇宙創生から存在しているものではなく、後に造られたものであるから、変更することができる。しかも文化と文明からそのアイデアを持ち込むことができると考えた。そのためにこの学派は大きな迫害を受けた

- が、十九世紀になってアラビア・ルネサンスの知識人から取り上げられるようになった。以下のものを参照されたい。ゲルハルト・エンドレス (Gerhard Endress)、『イスラーム——その歴史概説』(Der Islam: eine Einführung in seine Geschichte) (ムンヘン、一九八二年)。
- (10) エジプト文学におけるモダニスト運動の傑物の一人で、彼の著作は小説、批評、社会論、政治論にわたっている。エジプトの外では彼は自伝『アル・アヤーム』(Al-Ayyam) で最もよく知られている。この自伝の名称は「時代」という意味で、「エジプトでの子供時代」、「時代の流れ」、「パリへの道」という三部構成になっている。
- (11) ターハー・フセイン、『エジプトにおける文化の将来』(Mustaqbal al-haqīqa fi misr' カイロ、一九四六年)。
- (12) エジプトの新聞「アル・ジャリダ」の編集者であったが、後に政党「ウンマ党」を設立した。彼にはエジプトのナシヨナリズムに関する著作がある。また、エジプトのナシヨナル銀行の設立を推進した。
- (13) エジプトのジャーナリスト、詩人、文芸批評家で、二十世紀アラビア詩と批評の改革者の一人である。また、文芸批評の同人誌「ディワン」(Dīwan) を創設した。
- (14) トルコを独立に導いた政治家にして軍人で、オスマン朝による支配が終わった後、初代大統領となり、カリフ制度を廃止した。またあらゆる領域で重要な文化改革を行い、トルコ語のアラビア文字表記を止めラテン文字表記を採用した。なお、以下のものを参照されたい。M・ヤップ、『中東の構造：一七九二—一九二三』(The Making of the Near East 1792-1923) (ロンドン、一九八七年)。
- (15) エジプトのイスラーム学者、イスラーム法の判事。イスラームの世俗主義における知性の父と見なされている。なお、彼にはさまざまな分野における論者があり、後に宗教財産に関する大臣をつとめた。
- (16) 以下のものを参照されたい。アドニス、『黒い海洋』(Océano negro) (ミラノ、二〇〇六年)；M・Charfi、『イスラームと自由——歴史の誤解』(Islam et liberté: Le malentendu historique) (パリ、一九九九年)；A. Laroui、『イスラームの現実主義的リベラリズム』(Islamisme Modernisme Libéralisme) (カサブランカ、一九九七年)。
- (17) チュニジアの独立を導き、植民地支配が終わったあと初代大統領になった。また女性に多くの権利を認める重要な改革を行った。
- (18) チュニジアのナシヨナリストで、伝統的宗教の知識を兼ね備えていた政治的活動家。労働組合に関する著作があり、女性解放に関する著名な著作「われわれの女性、イスラーム法と社会」(Nôtre Femme, la législation islamique et la société) (チュニス、一九八七年) がある。
- (19) イタリアの歴史家・政治家。彼はその著作のなかで南

- イタリアの貧困地域の状況を訴えた。また、ファシズムと戦い、政治運動「正義と自由」の結成に協力した。なお、イタリアの政治文化および社会文化についても著作を残している。
- (20) 教育から宗教を分離させる考え。
- (21) N・ボッピオ、『ファシズムから民主主義へ』(Dati fascismo alla democrazia) ミラノ、一九九七年、一九九頁。
- (22) イタリアの哲学者・政治家。ファシスト政権下で知的活動を行い、閣僚として教育システムの改革を行った。教育学と哲学に関する著作がある。
- (23) N・ボッピオ、『ファシズムから民主主義へ』、二〇〇頁。
- (24) イタリアの哲学者・法学者。彼は政治的議論に参加し、リベラリズムと人権に関して重要な研究を行った。彼はまた上院議員にも任命され、リベラリズムと人権に関する貢献によって多くの博士号を獲得している。主要著作として、『政治と文化』(一九五五年)、『権利の時代』(一九九〇年)、『左と右』(一九九四年)、『ファシズムから民主主義へ』などがある。
- (25) イタリアの経済学者・政治家。ファシズムと戦う。財政学に関する多くの著作があり、一九四八年にはイタリアの大統領になった。
- (26) N・ボッピオ、『ファシズムから民主主義へ』、二六五頁。
- (27) シリア生まれ。ソルボンヌ大学教授。人権と民主主義に関する著作がある。
- (28) イスラームの作家・活動家。アメリカでの学生生活を終えた後、西洋文明に幻滅を抱き、「ムスリム同胞団」に参加し、その最も重要な思想家になった。拘束されていた期間に、急進的で教義的な書物を著し、その作品は急進的なイスラーム運動を鼓舞した。
- (29) N・ボッピオ、『権利の時代』(L'età dei diritti)、『およびカント (Immanuel Kant, 1724-1804)』『永遠平和のため』(Zum ewigen Frieden)。
- (30) 日蓮、『立正安国論』、『国を失い家を滅せば何れの所にか世を通れん汝須く一身の安堵を思わば先ず四表の静謐を禱らん者か』、創価学会版『日蓮大聖人御書全集』、三二頁。
- (31) 一八七九年から八二年にかけてエジプトで起きたヨーロッパ化に対する抵抗運動。
- (32) エジプトの国民的指導者。当時エジプトを支配していたイギリスに対する抵抗運動「ワフド」(Wafd)を組織した。後に首相となり、エジプトの政治改革を行った。
- (33) イタリアの政治活動家。ファシズム政権下、雑誌『自由革命』を発刊し、そのためにフランスに亡命し、そこで没した。
- (34) N・ボッピオ、『Premessa』, *On Liberal revolution*, under the editorship of N. Urbinati, Yale University Press, 2001.

- (35) アドニス、*Hadhā huwā ismī, Muqaddima li ta'rikh al-mulūk al-tawā'if*, in *Diwān, Beirut, Dār al-'Awda*, 1975.
- (36) D. Ikeda and M. Tehranian, *Global Civilization*, 一三〇—一三三頁。日本語版『二十一世紀への選択』、二六九頁以降。
- (37) ユルゲン・ハーバーマス、『他者の受容——多文化社会の政治理論に関する研究』(*Die Einbeziehung des Anderen. Studien zur politischen Theorie*) 法政大学出版局、二〇〇四年。
- (38) N・ボッビオ、『権力の時代』、一四二頁。
- (39) 池田大作、『第三十一回『S G Iの日』記念提言『新民衆の時代へ 平和の大道』』

(F・M・コッラオ／ナポリ東洋大学教授、
東洋哲学研究所海外研究員)
(おんだ れいこ／翻訳者・通訳者)
(マルチェラ・モルガンテイ／翻訳者・通訳者)

(本稿は、二〇〇六年六月二十八—二十九日にイタリア・ベニスで行われたジョルジオ・チニ財団主催のシンポジウムでの発表原稿に加筆したものです)